

# 『群書類従』を探る

-- 江戸のオープン・アーカイブから  
ジャパナレッジへ --



---

Web版群書類従セミナー

2014.10.3/7

江上敏哲

## (参考文献)

- ・太田善麿.『塙保己一』. 吉川弘文館, 1966. (人物叢書).
- ・塙保己一史料館, 公益社団法人温故学会. <http://www.onkogakkai.com/>
- ・川瀬一馬.「塙検校と群書類従」.『塙保己一記念論文集』. 温故学会, 1971.
- ・小林健三.「類聚国史と群書類従 : 和学の成立をめぐって」.『塙保己一記念論文集』. 温故学会, 1971.
- ・坂本太郎.「和学講談所における編集出版事業」.『古典と歴史』. 吉川弘文館, 1972.
- ・榎内愛子.「江戸時代の随筆に見る塙保己一」.『温故叢誌』. 1998, 52.
- ・榎内愛子.「江戸時代の随筆にみる塙保己一・群書類従」.『文献探索』. 1998, 1997.
- ・榎内愛子.「江戸時代の随筆にみる塙保己一 その2」.『文献探索』. 1999, 1998.
- ・榎内愛子.「江戸時代の随筆にみる塙保己一 3」.『文献探索』. 2000, 1999.
- ・嵐義人.「記念講演 塙検校における学問の意義」.『温故叢誌』. 1999, 53.
- ・斎藤幸一.「『群書類従』版木による摺立てについて」.『温故叢誌』. 2000, 54.
- ・谷口守, 比良 輝夫.「明治期の平仮名表記に関する一考察(1)とくに『群書類従』(再翻刻)をめぐって」.『北海道教育大学紀要. 教育科学編』. 2002, 53(1).
- ・池田恭子.「塙保己一と和学講談所に関する一考察--和学講談所設立の背景と塙保己一の意識・構想を中心に」.『温故叢誌』. 2005, 59.
- ・斎藤幸一.「『群書類従』版木の歴史--版木倉庫の建設・版木の献納・摺りたて再開」.『温故叢誌』. 2006, 60.
- ・小澤弘.「江戸の出版文化と塙保己一」.『温故叢誌』. 2008, 62.
- ・齊藤幸一.「和学講談所の蔵書数と管理」.『温故叢誌』. 2008, 62.
- ・熊田淳美.『三大編纂物, 群書類従, 古事類苑, 国書総目録の出版文化史』. 勉誠出版, 2009.
- ・小川靖彦.「最古の冊子本萬葉集・元暦校本--その美・歴史的意義と塙保己一検校」.『温故叢誌』. 2010, 64.
- ・幸田露伴.「群書類従に就て」.『温故叢誌』. 2011, 65.
- ・遠藤慶太.「失われた古典籍を求めて : 『日本後紀』と塙保己一」.『温故叢誌』. 2011, 65.
- ・齊藤幸一.「『群書類従』版木の変遷と文化財の保存」.『温故叢誌』. 2013, 67.
- ・「ケンブリッジ大学図書館の『群書類従』に関する新情報」.『鷺水亭より : 折々のよもやま話』.  
<http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2014/04/post-dbd6.html>
- ・伊藤鉄也.「英国ケンブリッジ大学と米国バージニア大学の『群書類従』」.(塙保己一検校生誕第二六八年記念大会, 2014).  
[http://genjiito.blog.eonet.jp/default/files/140502\\_onko.pdf](http://genjiito.blog.eonet.jp/default/files/140502_onko.pdf)
- ・「The Japanese collections at Cambridge University Library and Gunsho ruiju」.『Special Collections, Cambridge University Library』.  
<https://specialcollections.blog.lib.cam.ac.uk/?p=1597>
- ・寺田元一.『「編集知」の世紀 : 一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』. 日本評論社, 2003.
- ・吉見俊哉.『大学とは何か』. 岩波書店, 2011.
- ・吉見俊哉.「文化資源の保存・活用のために : 知識循環型社会における集合知と記録知の統合」.(京都府立総合資料館開館 50 周年記念シンポジウム, 2013).
- ・江上敏哲.『本棚の中のニッポン : 海外の日本図書館と日本研究』. 笠間書院, 2012.
- ・『国史大事典』
- ・『日本国語大辞典』
- ・『日本古典文学大辞典』
- ・『国歌大観』
- ・『日本中世史研究事典』
- ・『平安時代史事典』

## 0. 導入： 海を渡る群書類従

### ケンブリッジ大学の『群書類従』

- 1921、昭和天皇が皇太子だったころ、ケンブリッジ大学を訪問する。
- 1925年8月20日の朝日新聞の記事「英国の大学へ書籍を御寄贈」
- 4年前の訪問を記念して、ケンブリッジ大学に群書類従666冊、イートンカレッジに二十一代集を寄贈した。
- イギリスで本格的な日本研究・日本語書籍収集が始まる1940-50年代よりも前のこと。

3

- 現在、ケンブリッジ大学図書館Aoi Pavilionで、666冊すべてが、桐箱入りで所蔵されている。
- 現在のケンブリッジ所蔵の群書類従
  - Gunsho ruiju: FJ.84:09.1-666 (the present from Showa Emperor)
  - Gunsho ruiju (wood-block printing): FJ.84:09.672-745 (imperfect set)
  - Gunsho ruiju (modern printing): FD.84:01.1-19, FD.84:03.1-39
  - Shinko gunsho ruiju (modern printing) : FD.84:04.1-25
  - Zoku gunsho ruiju : FD.84:05.1-19, FD.84:06.1-72, FD.84:07.1-11

4

### ハワイ大学の『群書類従』

- 1928年、ハワイ大学図書館が渋沢栄一など日本の財界人に働きかけ、日本語書籍を寄贈してほしいと依頼。
- 渋沢栄一が資金集めを働きかけ、姉崎正治(東京帝国大学図書館長)が選書をして、954冊が寄贈された。
- その中に活字本の群書類従・続群書類従も含まれていた。

5

1. 群書類従の概要
2. 塙保己一の業績と生涯
3. 群書類従刊行の経緯と背景
4. 和学講談所の事業と背景
5. 群書類従の構成と収録著作
6. 群書類従の意義と評価
7. 群書類従とJapanKnowledge

## 1. 群書類従の概要

## 『群書類従』とは

- ・江戸時代に刊行された、最大かつ最初の本格的な”百科叢書”
- ・塙保己一が編纂・刊行
- ・1786年頃から開始 → 1819年完了
- ・古代から江戸前期の、国内の文献・著作  
1276種666冊  
(平安期:約30% 中世期:約65%)

8

## 塙保己一

「ある晩、弟子を集めて講義をしていたときに、風が吹いて灯りが消えたのを、保己一は気づかず話を続けていたので、弟子「先生、少しお待ちください、いま風で灯りが消えました」。保己一「さてさて、目あきというのは不自由なものだ。」

9

## 塙保己一とは？

- ・1746-1821
- ・江戸時代後期の国学者
- ・和学講談所の設立
- ・『群書類従』の刊行
- ・総検校

10

- ・書籍・学問
- ・明晰な頭脳と強靱な記憶力
- ・幅広い分野・人脈
- ・塙保己一自身の日記・文書の類がない
- ・伝承的エピソードが多い
- ・60歳を越えてもなお数度、文献調査のために京都に出向いている
- ・生涯で般若心経を読誦した回数は約22000回

11

## 2. 塙保己一の業績と生涯 - 叢書はなぜ生まれたか -

## 塙保己一の生い立ち

- ・1746、農家・荻野宇兵衛・きよの長子・寅之助として、武蔵国児玉郡保木野村(現、埼玉県本庄市)に生まれる。
- ・1752、7歳で失明。
- ・1760、江戸で、検校・雨富須賀一(あめとみすがいち)に入門。
- ・鍼・按摩・灸などの医術、琴・三味線などの音曲を学ぶが、上達せず。

13

- ・隣家の旗本・松平乗尹(のりただ)から学問を学ぶ。
- ・歌学者・萩原宗固(そうこ)に和歌・国学を学ぶ。
- ・闇斎流神道学者・川島貴林(たかしげ)に漢学・神道を学ぶ。
- ・山岡浚明(まつあきら、明阿)に律令・故実を学ぶ。
- ・孝首座(こうしゅそ)に医学書を学ぶ。
- ・1769、賀茂真淵に師事し、『六国史』を読む  
→約半年後、賀茂真淵逝去

14

- ・1775、勾当(こうとう)に昇進。名を「塙 保己一」とする。
- ・姓「塙」は、師・雨富須賀一の苗字から。
- ・名前「保己一」は、『文選』「己を保ち百年を安んず」から。
- ・このころ、高井実員(さねかず)宅に移り住む。(蔵書家)
- ・このころ、大田南畝との交流が始まる。

15

### 3. 群書類従刊行の経緯と背景 - 叢書はどう編まれたか -

#### 『群書類従』を企図する

- ・1779年正月、北野天満宮に般若心経百万巻読誦の誓い(『群書類従』出版の実現・完成を祈願)を立てる。
  - 各所に散在する国書一千巻を収集する
  - 板本の叢書としてまとめ、刊行する
  - 学問を学ぶ者の助けとする
- ・『魏志』応劭伝「五経群書以類相従」  
(注:正しくは『魏志』劉劭伝か?)
- ・菅原道真『類聚国史』

17

#### 『群書類従』刊行の背景

- ・出版技術の向上、受け手の増加。
- ・武家・町人・文化人が身分をこえて交流。
- ・国学(日本の古典・歴史等)が盛ん。  
↓↑
- ・和書・古典の入手・閲読は困難だった。
- ・公家・武家・寺社等が所蔵・秘匿し、公開しない。(所在確認、全体の把握ができない)
- ・散逸・逸失が危ぶまれた。

18

- ・村田春海(国学者)、『和学大概』、1792  
「我が国の古書で伝わっているものは多いが、刊行されているものが少ない。将来逸失してしまうのはなげかわしい。刊行されるべき」
- ・本居宣長、『玉勝間』、1793  
「古代の優れた本でいまなお写本のみのものが多い。それらを刊行して世に広めてほしい。蔵に秘めておくのは役に立たない」

19

- 塙保己一、幕府への借地願い書、1797  
「近来**文華**年々に開候処、**本朝**之書、未一部之**叢書**に組立、**開板**仕候儀無御座候故、**小冊子**之類、追々**紛失**も可仕哉と歎か敷奉存候」

## 『群書類従』刊行の経緯

- 1786、『今物語』（鎌倉時代の説話集）刊行同年、『群書類従』出版を開始。
  - 『今物語』は『群書類従』の”見本用”に作成。
  - 「毎月12冊づつ刊行。期間限定で塙検校宅で予約受付。限定200部。装丁は『今物語』と同様の仕立てである」（『群書類従』の広告文（大田南畝『一話一言』収録））
- 門人・人脈が増え、学者活動が活発化。（会読・校合）

## 蔵書・底本の渉猟

- 門外不出の資料
- 他に伝本のない孤本
- 江戸・名古屋・金沢・伊勢・京都・大坂など
- 幕府・紅葉山文庫
- 伊勢神宮
- 水戸藩・彰考館

- 寺社（増上寺、真福寺など）
- 公家（日野家、飛鳥井家など）
- 武家（浜田藩主、佐伯藩主など）
- 師匠（萩原宗固など）
- 知人・蔵書家（高井実員など）
- 門人（横田茂語（しげつぐ）、屋代弘賢など）

## 水戸藩『大日本史』校正に参加

- 立原翠軒（ちはらはすいけん、彰考館総裁）の推挙による。
- 1785、彰考館で『参考源平盛衰記』校訂に参加。
- 1788、保己一、『花咲松』（はなさくまつ）を刊行。（吉野朝の長慶天皇の即位・非即位問題について、水戸とは対立する非即位説を論証した著作。非即位説は現在は否定されるが、当時は論破できなかった）

## 水戸藩『大日本史』校正に参加

- 1789、『大日本史』の校正に参加する。
- 水戸藩の彰考館での校訂編纂に参加する。  
＝幕府により、学問的实力を認められた。

## 4. 和学講談所の事業と背景 - 学問と社会がせめぎあう場所 -

### 和学講談所の設立

- 1793、和学講談所の設立を幕府に申請し、認可される。
- 塙保己一、和学講談所設立の願書、1793「寛政の改革以来、諸学問が盛んになったが、和学だけがまだおこなわれていない。歴史・律令の類によりどころがない。そのための機関を設置して、和学に志があるものを学ばせたい」

27

- 幕府が設立を許可
  - 土地300坪を貸し与える(現 千代田区四番町)
  - 資金を貸し与える
  - 林大学頭の配下とし、官立に準ずる機関
- ”公的事业”として公認される(その後も公的援助などあり)
- 松平定信が「温故堂」と命名する
- 記録:『和学講談所御用留(ごようどめ)』

28

### 和学講談所設立の背景

- 国学の台頭
- これまでの会談・校合活動の実績。
- 水戸藩『大日本史』校正参加の実績。
- 検校としての経済的基盤。
- 有識者・幕府関係者との人脈。
- 幕府の文教政策  
和学機関の不在  
(寛政の改革、昌平坂学問所、朱子学以外の禁)

29

### 和学講談所の運営

- 林大学頭の支配下に入り、官立に準ずる機関
- 運営資金
  - 幕府からの資金提供・手当
  - 幕府からの借金
  - 鴻池など商人からの借金
  - 検校としての保己一の収入
  - 移転時の借地・資金

30

### 和学講談所の機能

- 和学・国学の教授・会読
- 古典・文献の調査・収集・校訂
- 幕府の要求に応じ資料提出・原案起草
- 出版事業  
(保己一の『群書類従』刊行事業を含む)

31

## 和学講談所の活動

- 1793、竣工翌日から会読が開始される。
  - 会頭は、奈佐勝奉(かつたか)・屋代弘賢(ひろかた)・横田茂語(しげつぐ)・松岡辰方(ときかた)
  - 毎月3回、二の日に定例会
  - 『古事記』『六国史』『律』など(学則)
- 全国に出向き、公家・武家・寺社の孤本・秘本を書写・収集する。
  - 幕末期で12000冊所蔵(和学講談所蔵書目録)

32

## 公家記録の書写事業

- 公家の家記・日記類を書写し、紅葉山文庫に収める事業。(1799～)
- 「歴史記録としての諸家の記録は、秘蔵されているので類本が少なく失われたものも多い、これを書写して文庫に収めれば末代に伝えられる」(保己一の願書)
- 結果として、『和学講談所蔵書目録 家記之部』には310部が登録されている。

33

## 和学講談所の出版事業

- 『群書類従』『続群書類従』
- 『日本後紀』の校訂・刊行(1799)(後述)
- 『令義解』の校訂・刊行(1800)(上代の法文解釈書、中世に刊本逸失)
- 『孝義録』の校訂・版下の作成(1800)(幕府の庶民教化策、幕府からの委嘱)
- 『史料』『武家名目抄』編纂開始(1806)

34

## 『元暦校本万葉集』

- 原本は元暦元年1184年に藤原顕家が校合させた写本。
- 東京国立博物館が所蔵。国宝。14帖。
- 江戸時代に流布していた仙覚本より古くその影響を受けていない。
- 保己一が文化年間に書写したものを、後に忠宝の代で刊行。

35

## 『日本後紀』(全40巻)

- 六国史(『日本書紀』をはじめとする勅撰歴史書)のひとつ。  
桓武・平城・嵯峨・淳和天皇の時代を収録。
- 江戸時代にはすでに逸失
  - 『類聚国史』・『日本紀略』等への引用文のみ
  - 徳川光圀校訂の六国史にも収録されなかった

36

- 1799-1801、和学講談所が『日本後紀』木版本を刊行
  - 第5、8、12、13、14、17、20、21、22、24巻(全40巻中10巻)
  - 門人が京都で書写。保己一が校訂。
  - 底本は、「三条西家の本と”思われる”」(伏見宮の本、柳原紀光の本などの異説あり)
  - 三条西家『日本後紀』は、加賀藩主・前田綱紀の支援で保存・修復された。現在は天理図書館所蔵。

37

## 『史料』

- 官の事業として、幕府から認可・資金援助等を受ける。
- 編年体の史料集。
- 「六国史」以降、宇多天皇から後一条天皇まで約140年間・約430巻
- 1806年～1861年
- 東大史料編纂所『大日本史料』の起点となった。

38

## 『武家名目抄』

- 武家に関する基本的な参考図書。鎌倉時代以来の武家に関する名称・語彙等について、16の部門に分け、古記録から引証・解説。
- 幕府から塙保己一に編纂が命じられたもの。
- 幕末までに約381冊で完結。

39

## 『群書類従』の刊行完了

- 1819、正編全冊の刊行完了（保己一74歳）
- 1821年9月12日、塙保己一逝去

40

## 『群書類従』 同時代の評価

- 大田南畝「和書の散逸せるをなげき、大志願を起し、天下のあらゆる和書を校訂して世に伝えんとす」『一話一言』
- 平田篤胤「これまで各所に秘蔵されていた、たいていの人が見聞きしたことのないような古書が少なくない」『古史徴開題記』
- 「天下の学者、たやすく古書をうかがふことを得し」(高田(小山田)与清(ともきよ)『擁書漫筆』)
- 「これに依て伝へ不朽となること」(青柳文蔵『続諸家人物志』)

41

- 本居宣長「板本なのだから世間に広く出回ってほしいのに、いまだに書店で目にしたことがない」(石原正明宛ての書簡)
- 「毎月12冊づつ刊行。期間限定で塙検校宅で予約受付。限定200部。装丁は『今物語』と同様の仕立てである」(『群書類従』の広告文(大田南畝『一話一言』収録))
- 一般書店に流通しない。

42

## 『群書類従』のその後

- 1795頃、『続群書類従』に着手
- 1821年9月12日、塙保己一逝去
- 1822、四男・忠宝(ただとみ)が塙家を継ぐ
- 続編の事業は難航
- 1862、孫・忠韶(ただつぐ)が継ぐ
- 1868、和学講談所廃止。
- 1883、続編・未完成の写本が宮内庁に献上
- 以降、続群書類従完成会が継続

43

## 現在の『群書類従』

- 活字本  
明治以降、数種類刊行される
  - 群書類従出版所
  - 経済雑誌社(田口卯吉)
  - 群書類従刊行会
  - 続群書類従完成会(現代まで最も普及)
- 2006、続群書類従完成会が閉会  
→以降、八木書店が販売等を継続  
(オンデマンド版活字本、web版)
- 他にCD-ROM版・USB版(大空社)

44

## • その他

- 『続々群書類従』(国書刊行会)
- 『群書解題』(続群書類従完成会)
- 『正續分類総目録・文献年表』(続群書類従完成会)

45

## 公益社団法人 温故学会

- 公益社団法人 温故学会  
塙保己一史料館  
<http://www.onkogakkai.com/>
- 1909、渋沢栄一、井上通泰、芳賀矢一、塙忠雄(曾孫)により設立
- 盲人福祉事業、各種啓発事業、機関誌『温故叢誌』等の刊行
- 『群書類従』版木の保管と摺立て頒布

46



## 版木

- 『群書類従』版木 約17000枚
- 材質:山桜の木
- 20文字×20行(原稿用紙の原型)
- 1957、重要文化財指定
- 温故学会で、保管・一般公開
- 注文に応じ頒布中  
(「群書類従摺立頒布 全666冊」)

48

## 5. 群書類従の構成と収録著作 - オープン化された文献たち -

49

## 『群書類従』の構成

- ・ 正編： 1276種530巻666冊
- ・ 続編： 2128種1150巻1185冊
- ・ 古代から近世初期まで
- ・ 平安時代が30%。鎌倉室町時代が65%
- ・ 当時の稀覯・貴重文献をほぼ網羅する

50

- ・ 分類は25部。  
菅原道真『類聚国史』その他にならう
- ・ 神祇・帝王・補任・系譜・伝・官職・律令・公事・装束・文筆・消息・和歌・連歌・物語・日記・紀行・管絃・蹴鞠・鷹・遊戯・飲食・合戦・武家・釈家・雑
- ・ 「国学の体系を史料によって示した百科事典の一種」(小林健三、「類聚国史と群書類従：和学の成立をめぐって」)

51

## 『群書類従』の編纂方針

- ・ 3巻以下の小冊に限定した。  
(小冊の資料は散逸のおそれが高いため)
  - ・ 底本の選定
    - 良本を選ぶ
    - 他本による校訂も行う
    - 他に伝本のない孤本を収録し、存在を世に知らせる
- [収録著作の(例)]

52

## 『梁塵秘抄』

- ・ 『梁塵秘抄』(本編全20巻)
- ・ 平安時代の歌謡集。後白河天皇撰。
- ・ 存在のみ知られ、作品は逸失。
- ・ 『群書類従』に口伝集巻十のみ収録。
- ・ その後、明治末期に一部が発見された。
- ・ 現存するのは、本編全20巻中、巻1巻頭(断簡)・巻2(全体)、口伝集巻1巻頭(断簡)・巻10(全体)

53

## 『作庭記』

- ・ 平安時代の造園の秘伝書。橘俊綱著。
- ・ 『群書類従』に収録されることで、その存在が広く知られるようになった
- ・ 底本の所蔵者は萩原宗固(保己一の歌学の師)
- ・ 後年、原本(谷村家蔵本)が発見されている。(重要文化財)

54

## 『群書類従』にのみ残る本

- ・ 原本がすでに逸失した例は多数あり
- ・ 『御評定着座次第』
  - 室町幕府の御前評定出席者記録。
  - 『群書類従』所収本以外知られていない。
- ・ 国歌大観に収録されている和歌集の例
  - 『朗詠百首(隆房)』
  - 『閑窓撰歌合 建長三年』……
  - これらは『群書類従』本以外に伝本がない。

55

## 『北野天神縁起』

- ・『北野天神縁起』(全3巻)
- ・北野天満宮の縁起絵巻。成立は平安時代末期か。
- ・諸本が多様に伝存する。
- ・「流布本たる群書類従本のごとき形態に固定するに至ったのは室町時代」(国史大辞典)

56

## 『建武記』

- ・後醍醐天皇・建武政権の諸記録。
- ・「群書類従本には誤脱があり、『大日本史料』『日本思想大系』収録のものがよい。」(国史大辞典)

57

## 6. 群書類従の意義と評価 - “出版”がもたらしたもの -

## 『群書類従』の意義

- ・1797、板木の倉庫用地を幕府から借りるため、保己一が作成した願書。  
「近来文華年々に開候処、本朝之書、未一部之叢書に組立、開板仕候儀無御座候故、小冊子之類、追々紛失も可仕哉と歎か敷奉存候」
- (1) 逸失のおそれがある
- (2) 出版公開されていない
- (3) 叢書として編纂されていない

59

## 『群書類従』の意義

- ・書物と人とを結びつけること
  - ・そのために「保存」と「公開」が必要
  - ・それを「出版」によって実現する
- (1) 保存・複製(書写・出版)する
  - (2) アクセスの障壁をなくす
  - (3) 叢書として編纂する

60

## 保存・複製(書写・出版)する

- ・希少な書物が逸失するおそれがある
  - ・すでに逸失・所在不明の書物が多い
  - ・孤本が多い
- ↓
- ・調査によって所在不明の書物を探索する
  - ・収集(書写)・出版によって逸失を防ぐ
  - ・『群書類従』底本に逸失が多い  
残念ながら、予想は当たっていた

61

## アクセスの障壁をなくす

- ・ 公家・武家・幕府・寺社等がそれぞれで秘蔵して公開しない
- ・ あちこちに散らばっている
- ・ 閲覧・参照ができない
- ・ 国学(古典・和書)のニーズ増に応えられていない



62

## アクセスの障壁をなくす



- ・ 出版によって公共に提供する
- ・ 書物の存在を世に知らしめる
- ・ 閲覧・参照を可能にする
- ・ 武士に限らず町人にも頒布する(宣伝)
- ・ 叢書に集めることで、参照を容易にする

63

## 「壁のない図書館」

- ・ 熊田淳美、『三大編纂物, 群書類従, 古書類苑, 国書総目録の出版文化史』, 勉誠出版, 2009.
- ・ 『群書類従』は日本における「壁のない図書館」の典型だった。
- ・ エラスムスが出版・学術出版について言った言葉。王侯・貴族によって図書館という壁に囲い込まれていた／写本という形で閉ざされていた古典が、活版印刷業者によって校訂・印刷され広く社会に開放した。

64

## 叢書として編纂する

- ・ アクセスが容易になる
- ・ 『類聚国史』や中国の叢書にならい、資料を集大成する。(「異朝には漢魏叢書などよりはじめて、さる叢書どもも聞えたり」「さらばここにもかしこにならひて」中山信名『温故堂堦先生伝』)
- ・ 散在／渾然とした状態から、整理する史料を分類する・体系化する  
→学問の分類・体系化  
(地図化／説明可能化)

65

## 『群書類従』の時代背景

- ・ 『群書類従』と同時期、国内・国外の背景
  - ・ メディアの近代化(=出版)が起こる
  - ・ 知識の近代化(=「叢書」・体系化)が起こる
- ↓
- ・ それが、社会の変化を起こす、力となる。

66

## 近代“出版”と“知識の組織化”

- ・ 知識を保存・継承するためには  
(出版以前) 秘匿・限定、が必要だった  
(出版以降) 複製・開放・公共化、が必要とされるようになった
  - ・ メディアが変化する(“出版”の登場)
- ↓
- “知識”のあり方が変化する
- ↓
- 社会が変化する

67

## メディアの変化が、社会を変えた

- ・ 出版(技術・流通)による、情報の大量生産・普及
- ・ 情報・文献を参照することによる、科学的姿勢
- ・ 受容～生産のサイクルを担う、“人”の層(エリート／文化人／国民)

68

## 知識が“組織化”される時代

- ・ 叢書・文庫・博物誌の編纂
  - “知”が集積し、組織化し、ネットワーク化する
  - 大量の“知”を、体系化+アクセス容易化する
- ・ 書物を媒介とした交流・結合(知・人)  
(フランス百科全書派:百科全書執筆・編集という人的ネットワークによる文化活動)

⇒『群書類従』は、出るべくして出た

69

## 『群書類従』の現代的評価

- ・ 幸田露伴「群書類従には当時未刊行だったものが多い。秘密相伝が多かった当時において、各部門にわたって書物を収集し刊行した」
- ・ 佐佐木信綱「鎌倉・足利時代の書物で、群書類従によって一般の学問界に伝えられようものが少なくない」
- ・ 川瀬一馬「近世(江戸時代)に於ける最も注意すべき文化活動である」

70

- ・ 大久保利謙(としあき)「群書類従の学問レベルは高く、明治初期には国学系の考証学は儒教系をしのぐほどだった」
- ・ 坂本太郎「群書類従ほど広い分野にわたり必要欠くことの出来ない書物を集めている叢書はほかにない」「同類の必要な書物をまとめて見ることの出来る便宜がある」「その後に出た同類の叢書の模範になった」

71

- ・ 国史大辞典「この叢書の刊行によって稀覯書の散佚が防がれ、諸書が容易に見られるようになったことは大きな功績である」
- ・ 平安時代史事典「広範囲にわたる書物が容易に見られる功績」
- ・ 日本国語大辞典「流布本を避けて善本を精選した貴重な資料集」

72

## 底本・校訂の問題

- ・ 坂本太郎「校訂にもの足らぬ所はあるにしても、同類の必要な書物をまとめて見ることの出来る便宜はその欠点を補ってあまりある」
- ・ 国史大辞典「所収書の底本の不十分さ、底本の本文と対校本の本文とのすり替えによる混乱」
- ・ 平安時代史事典「今日の時点からは、底本選定や本文批判等に問題が少なくない」

73



- 日本古典文学大辞典「今日から見れば文献の書誌的検討や本文批判に不備を認めるべきものも少なくない」
- 日本中世史研究事典(1995)「『群書類従』『史籍集覧』もよく用いられるが、いかんせん刊行年代が古く、ただちに從えない本文によっているものが多い(ことに『続群書類従』はその傾向が強い)。」

74



## 実際の使われ方は？

- 大学で日本中世史を専攻している者です。  
Yahoo!知恵袋 <http://bit.ly/1nD2fTE>
- 日本人の礼儀の歴史について、調べたい。
- 「『群書類従』なんかを見るのがいいんじゃないですかね。これを読めば、公家の作法や武家の作法(戦闘時)の流れが、漠然と掴むことができます。」

75



## 実際の使われ方は？

- 卒論における活字史料について  
OKWave <http://bit.ly/1nD3su7>
- 『群書類従』等の活字本は孫引きか？
- 「卒論レベルでは「孫引き」にはならない」「底本情報を明示すべき」「(修論以上)今後研究を続けられる際には必ず原典にあたりました。早晩「閲覧不許可」という、でかく厚い壁にすぐにぶち当たることでしょう。」

76



## 参考図書類の底本として

- 『国歌大観』
  - 凡例「原則として広く一般に流布している系統の中から最善本を選んで底本とした」
  - 『閑窓撰歌合 建長三年』「底本は群書類従巻第二一六所収本。他に伝本の存在を聞かない。」
  - 『七夕七十首(為理)』「伝本は現在、群書類従本、書陵部蔵本、静嘉堂文庫蔵本の三本が知られており、板本群書類従本を底本に諸本を参照した。」

77



## 参考図書類の底本として

- 『日本国語大辞典』
  - 第1巻「凡例」「出典・用例について」「底本は、できるだけ信頼できるものを選ぶように心がけたが、検索の便などを考え、流布している活字本から採用したものもある。」
  - 例: 顯輔集、十六夜日記、今物語…(『群書類従』を底本としている)

78



## 『群書類従』のメリットとは？

- △ 本文としての質・正確さ
- △ 文献それ自体の現代における価値

79

## 『群書類従』のメリットとは？

- 文献が保存・継承されていること
- 読みやすい状態に整備されていること  
(版本化・活字化)
- ◎ 参照・アクセスしやすいこと(オープン化)
- ◎ ひとつところに集まっていること(叢書化)
- 分類・整理されていること(部立・連番)
- ”区切り”をつけられること(全編通読)
- ◎ ”あたり”をつけられること(レファレンス)

80

## 7. 群書類従とJapanKnowledge - データベース化がもたらす ”知”のつながり -

81

## 『群書類従』とJapanKnowledge

- ◎ひとつところに集まっている(叢書)
  - ◎参照・アクセスしやすい(オープン化)
  - ◎”あたり”をつけられる(レファレンス)
- +
- ・ データベースとして検索可能
  - ・ テキストデータ化され、サーチできる
  - ・ **JapanKnowledge**というプラットフォーム
- ↓
- 統合検索 / 相互参照  
ファインダビリティ / セレンディピティ

82

## JapanKnowledge

- ・ 小学館グループの(株)ネットアドバンス
- ・ 有料会員制
- ・ 国内外の出版各社の事典・辞書・本文
- ・ 40種類を超えるコンテンツ  
総項目数約218万
- ・ 統一のインターフェースで、  
見出し／本文を、検索・参照が可能

83

## JapanKnowledge

- ・ ひとつの契約で
- ・ 複数の参考図書・DB・コンテンツを  
同一プラットフォーム上で
- ・ 人文社会系に必要なDBをカバー
- ・ ディスカバリーシステムに対応
- ・ 海外での契約におけるメリット

84

## 『群書類従』とJapanKnowledge

- ・ 統合検索ができる
    - 複数の文献を串刺検索できる
    - 異なる参考図書・DB・コンテンツを  
串刺検索できる
- ↓
- 比較・対照することが容易になる
  - 連想的・発想的な検索と発見ができる

85

## 『群書類従』とJapanKnowledge

- 相互参照ができる
  - 『群書類従』本文から→他の参考図書を参照
  - 他のコンテンツ・参考図書から→『群書類従』本文を参照
  - (例)『日本歴史地名大系』の本文で引用されている文献を、『群書類従』で確認する。
- 単一のデータベース、CD-ROMではかなわないこと

86

## 『群書類従』とJapanKnowledge

- ファインダビリティが上がる
  - 多数の代表的コンテンツを備えたプラットフォームだからかなうこと (学際的・国際的・総合的)

87

## 『群書類従』とJapanKnowledge

- セレンディピティが増える
  - メタデータ・参考図書だけでは実現できないこと
- 適合度の高い情報(参考図書)だけを的確に参照できる
  - 全文検索・webサーチだけでは混乱する

88

## (例)『群書類従』に黒田官兵衛関連の文献は？

- 『群書類従』で「黒田官兵衛」を検索する
- 黒田官兵衛の”ほかの名前”は？

1. 豊臣  
豊臣秀吉一代の事蹟を仮名で綴った記録  
群書類従: 第二十輯: 合訂部  
545ページ  
其昔四国へ美濃守秀長を大将として、蜂須賀藤右衛門、黒田官兵衛、小早川隆景、...  
551ページ  
をこし陸奥守を討んとせし事罪科の至りて、黒田官兵衛を後便に下し、筑...  
> 該当ページ一覧を見る (2ページ)

2. 柴田退治記  
豊臣秀吉が柴田勝家を討伐した時の戦記  
群書類従: 第二十一輯: 合訂部  
263ページ  
浅野羽兵衛長政、一柳市助直末、五番生駒基助政勝、小寺官兵衛時孝高、明石幸四郎頼俊、...

89

## (例)『群書類従』に黒田官兵衛関連の文献は？

- 『国史大辞典』で「黒田官兵衛」を見出し検索する
- ヒットなし
- 複数の参考図書で「黒田官兵衛」を見出し検索する
- 『日本人名大辞典』などで「黒田官兵衛 → 黒田孝高(くろだよしたか)」がヒット

90

見出し 黒田 官兵衛

フレーズ検索

検索結果 検索オプション

3件 JKおすすめ順

- 黒田官兵衛 日本大百科全書  
→ 黒田孝高(くろだよしたか) ...
- くろだ-かんべえ【黒田官兵衛】 デジタル大辞泉  
⇒ 黒田孝高(よしたか) ...
- くろだ-かんべえ【黒田官兵衛】 日本人名大辞典  
⇒ 黒田孝高(くろだ-よしたか) ...

- 『国史大辞典』だけで「黒田孝高」をあらためて見出し検索する
- [参考文献]を参照する

後、遺言によって博多の教会に一〇〇〇エクスを寄付させたといわれる。

【参考文献】

『大日本史料』一ノ二 慶長九年三月二十日条、『寛政重修諸家譜』四二五、貝原篤信『黒田家譜』（『益軒全集』五）、金子堅太郎『黒田如水伝』

(柴多 一雄)

92

- 『国史大辞典』で「黒田孝高」や「如水」で「群書類従」を“全文”検索する

93

- 『神屋宗湛日記』に記述あり？（『群書類従』では『神屋宗湛筆記』で収録）  
『玄与日記』に黒田如水登場？（『群書類従』日記部所収）
- 『群書類従』で本文を確認
- わからない単語・人名・地名を調べる（同じJapanKnowledge上で）
- 外部サイトへ、次への展開へ（同じブラウザ上で）

94

## 【まとめ】

95

## まとめ

- 『群書類従』  
個々に所蔵され公開されなかった書物を、叢書・出版によって公開し、書物と人との間の障壁をとりのぞいてアクセスを可能にした。
- 『JapanKnowledgeの群書類従』  
個々に閲覧・検索するしかなかった書物を、同一プラットフォーム上に載せ、書物と人との間の障壁だけでなく、書物と書物との間の障壁をとりのぞいて、アクセスを容易にする。

96